



IRCN

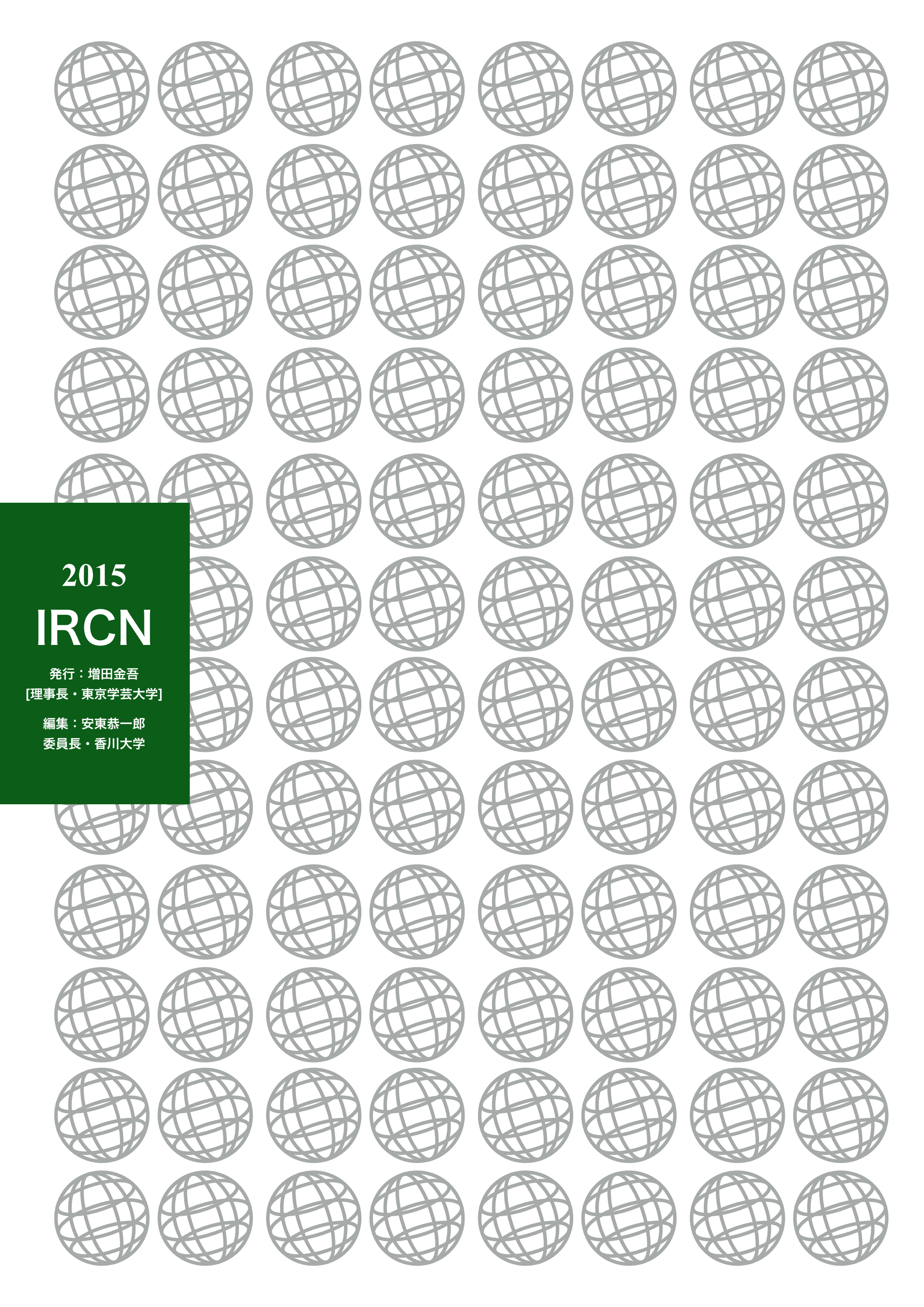
国際交流情報

International Relationship Committee News

第11号

2015

大学美術教育学会
国際交流委員会
国際交流情報誌



2015 IRCN

発行：増田金吾
[理事長・東京学芸大学]

編集：安東恭一郎
委員長・香川大学

Contents

特集：世界の美術教育と教育実践

フランス高等美術教育についての報告
～リヨン国立高等美術学校訪問から～

広島文化学園大学 学芸学部 子ども学科 小笠原文 4

中国内モンゴル自治区の小学校美術教育の現状
―地域材料を生かした授業実践を通して―

新潟大学 格根薩仁（ゲゲン サリン） 6

ベトナムの美術教育を見学して思ったこと

山口大学 福田隆眞 10

エントリー・ポイント, MTV (Making Thinking Visible)
およびVTS(Visual Thinking Strategy) アプローチの関連性
―オランダでの新しい鑑賞教育の試みThinking Museumの実
践から―

埼玉大学 池内 慈朗 12

国際交流委員会 自己紹介

ブータン王国にみる造形教育の方向性

大泉義一（横浜国立大学） 16

編集後記 17

特集：世界の美術教育と教育実践

フランス高等美術教育についての報告 ～リヨン国立高等美術学校訪問から～

広島文化学園大学 学芸学部 子ども学科 小笠原文

1. 調査旅行の概要

2015年2月25日から3月12日にかけて、フランス調査旅行を実施した。今回は、安東恭一郎先生（香川大学）、結城孝雄先生（東京家政大学）、金政孝先生（韓国教育課程評価院）とその行程の一部を共にし、視察・調査を行った。主な訪問地はParis, Lyon, Venceであったが、今回の報告では特にLyon（3月5日～7日）で訪問したリヨン国立高等美術学校(Ecole Nationale Supérieure des Beaux-Arts de Lyon)を取り上げたい。3月6日（金）、リヨン国立高等美術学校を訪問し、国際交流担当事務員による大学全体のアトリエ・授業案内及びBruno Carbonnet先生による美術基礎科目・デッサンについての授業説明を受けた後、授業の様子を視察した。

2. フランスの美術教育 ～中・初等教育における「民主化」の遅れ～

フランスにおいて、特に初等・中等レベルでの美術教育について、その「民主化」が遅れたことは周知のことである。芸術や文化は特権階級の所有物であり、それを広く国民に伝える、言い換えれば「教育する」ことについて、フランスの教育政策の中では長らく重要視されてこなかったことは、未だにフランスの美術教育の改革事項の根拠として「芸術の民主化」が挙げられるほど根深く残る。フランス革命から第三共和国にかけての教育の民主化政策の中で芸術へのアクセスの民主化は忘れ去られていて、芸術的なものが小学校の教育科目にようやく登場するのは、1880年のジュール・フェリーの教育改革を待たなければならなかった。その扱いも「デッサン・塑像・音楽」は「お裁縫（女子のみ）」科目の次の末席ポジションに申し訳程度に設けられたものであったことを付け加えておこう。

3. フランスの高等美術教育

一方で、職業芸術家養成機関の歴史は長い。17世紀までは、職業芸術家を目指す子ども達は養成校に12歳～14歳で入学し修行を重ねた。彼らは学生であると同時に従業者であった。これら養成校が大きな都市ではアカデミーと呼ばれ、また無料のデッサン学校として門戸を開くようになる。それらが高等教育機関として整備されていった。1959年に教育相に就任した作家大臣アンドレ・マルローが国民文化政策を推進し、その中で高等教育における美術教育、すなわち「美術学校（Ecole des Beaux-Arts）」の整備を進めたことで知られている。文化庁管轄の美術学校は、現在国立として16校、地方公立として47校の美術学校がフランス各地に存在する。さらに教育庁管轄の国立大学学部内美術学科は13校ある。

4. リヨン国立高等美術学校

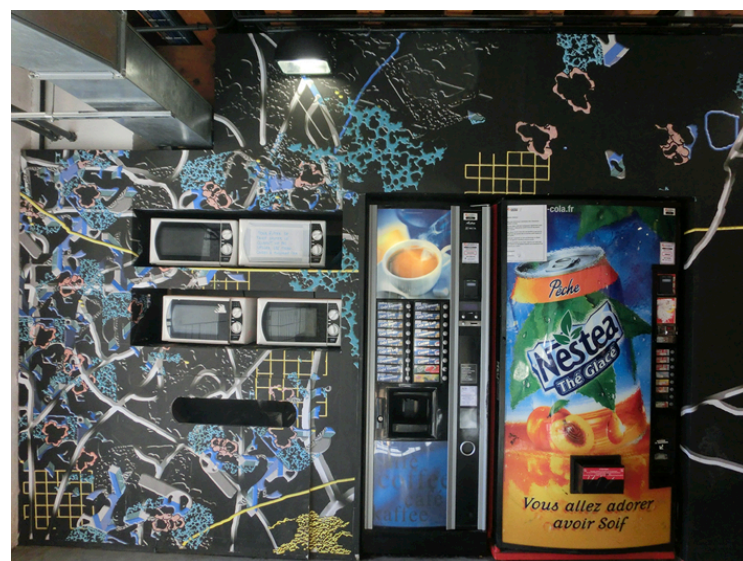
今回紹介するリヨン国立高等美術学校は、無料のデッサン学校として18世紀半ばに始まり、リヨンの紡績産業を背景に染織技術・テキスタイルデザインを担う学校として発展した。2007年にリヨン中心部から市街の外れ、ソーヌ川沿いのレ・シュブジスタンス(les Subsistance)に移転した。古くは女子修道院であり、前世紀は軍事施設として使用されていたこの建物は空間自体が歴史や機能を語りかける。美術を志す若者の学びの場としては理想的とも言える空間であろう。建物の性質上、住居空間も多く、アーティスト・イン・レジデンスもさかんに受け入れ、近隣の幼稚園・小・中学校への「芸術活動の強化」の拠点ともなっている。

5学年でおよそ350名の学生が在籍。毎年5月上旬に行われる入学選考試験にはフランス国内外から約1000名が受験する。作品ポートフォリオによる書類選考の後、作品プレゼン形式の面接試験を経て、最終的には80名程度が合格するという難関である。3年終了時と5年修了時に外部審査員招聘のもと試験が行われ、合格者には国家免状が与えられる。3年でDNAP art（国家芸術免状美術系）、DNAP design d'espace（国家芸術免状空間アート系）、DNAT design graphique（国家芸術技術免状グラフィックデザイン系）、DNAT design textile（国家芸術技術免状テキスタイルデザイン系）のいずれか、5年でDNSEP（国家上級造形表現免状）、DNSEP（国家上級デザイン表現免状）のどちらかを取得する。学生達は3年で修了し就職、或いは進学（他の美術学校への編入も可能）という進路を自ら選択していく。

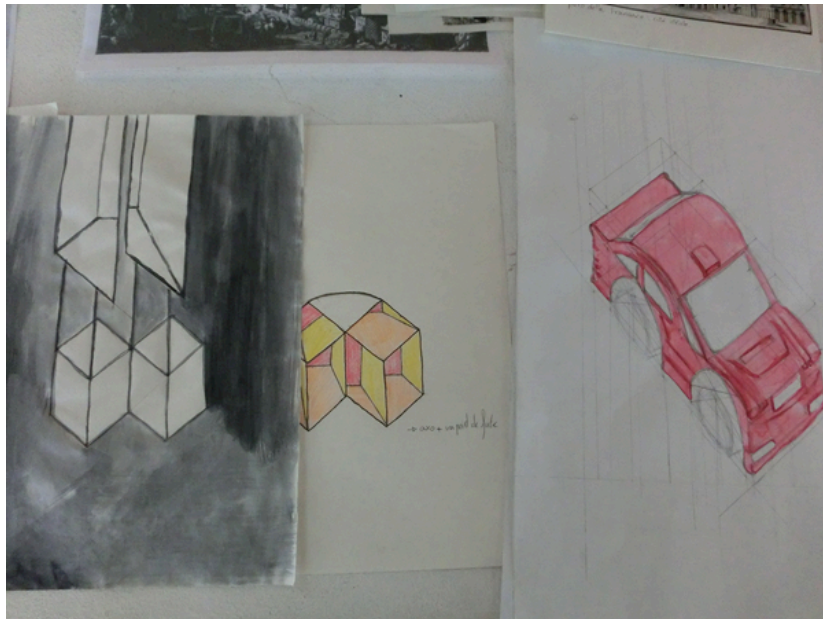
リヨン国立高等美術学校では、2年次よりファインアートコース、空間アートコース、グラフィックデザインコース、テキスタイルデザインコースに分かれるが、今回見学をした1年生のデッサンの授業は、コースに分かれる前に1年生全員が必修で履修するものである。



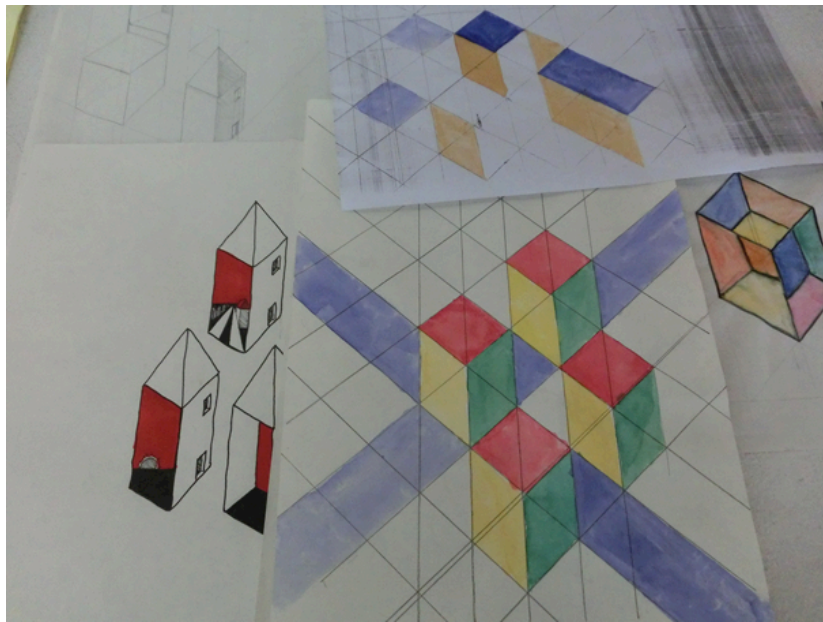
リヨン国立高等美術学校、正門を入れて正面の建物



リヨン国立高等美術学校。カフェテリア空間は学生の創作発表スペースでもある。「2か月ごとにカフェテリアの様相がガラリと変わるのは楽しみです。」と案内をして下さった事務員さん談。



リヨン国立高等美術学校 美術基礎科目・デッサン。学生作品



リヨン国立高等美術学校 美術基礎科目・デッサン。学生作品



リヨン国立高等美術学校 Bruno Carbonnet氏

授業担当者のブルノ・カルボネ（Bruno Carbonnet）氏は自らもフランスおよびイギリスの美術学校で学んだ美術実践家であり、指導者である。「デッサンは、空間を捉えることでもあるし、その空間内に存在する生命を捉えることでもある。」と述べるカルボネ氏のデッサンの授業のキーワードは「空間」であり、その捉え方や、その中でのモノの在り方について考えるための手段としてデッサンを位置づけている。

また、空間の一例として、生活空間（廊下・部屋・ドアなど）というものを取り上げ、実際の写真の中に直接描き込むといった活動も行うなど、多様な方法で空間把握を試みている。そこから、写真がデッサンのアイデアを生み出す場合もあるとカルボネ氏は説明する。例えば、「建物」の写真からそのエッセンスを抽出していくとそこから数多くのデッサンが生まれる。そのデッサンが旗になることもあれば、マケットになる場合もある。数多くのデッサンから学生自身が、どのデッサンをどのように使うかを考え、選択し、最終的には、作品（プロジェクト）へと繋げて行くことが授業の目的である。

評価の方法は、1枚のデッサン或いは最終的な作品のみで評価するのではなく、制作過程、つまり、最終的な作品に至るまでの数々のデッサンと変遷、その取捨選択の姿勢を見る。作品発表の場（試験に相当する）では、作品と自分が選んだ（もしくは選ばなかった）デッサンを展示し、解説を行う。作品に至るまでの軌跡を自分の中で明確に理解し、それを他者にプレゼンテーションする力もこの授業で育成していく重要な要素の一つである。

5.まとめ

技術よりも「何を伝えるために」「なぜ」「どのように」と試行錯誤する行為が重要視される部分はフランス現代美術の特徴でもある。つまり創作とはそこへ至る過程も含めてその価値が決定されるものであるという考え方であり、過程については感覚的、感情的なものよりも思索的な部分に重きを置く。このフランス現代美術の特色はそのままフランスの美術学校の教育スタイルに反映されている。

報告者は1995年から1999年までパリ国立高等美術学校に学生として在籍していたが、カルボネ氏の授業は報告者が受けた高等美術教育に通底することからも、これがフランスの高等美術教育のスタンダードと考えて良いであろう。また、この方法は初等・中等教育にも共通する部分がある。ここに至ったフランスの美術教育について、思想史的観点からの検証が今後の課題である。

リヨン国立高等美術学校(Ecole Nationale Supérieure des Beaux-Arts de Lyon)

学校長：Emmanuel Tibloux

8 bis quai Saint-Vincent 69001 Lyon

www.ensba-lyon.fr

メール連絡を行い、視察・調査を申し込むことができる。迅速で、丁寧。フランスでは例外的とも言える、非常に感じの良い対応が印象的であった

中国内モンゴル自治区の小学校美術教育の現状

―地域材料を生かした授業実践を通して―

新潟大学 格根薩仁（ゲゲン サリン）

1. 授業実践の目的

内モンゴル地域では、近年から急速な農地化による伝統的な社会構造の解体が進んでおり、社会的な変化及び中国からの多民族文化の影響など様々な要因によって、モンゴル民族の学校教育の内容が変容しつつある。本稿では、モンゴル民族の小学校における美術教育の問題点を示すことと、地域の材料を生かした美術教育の授業実践について報告することを目的とした。

2. 調査した学校の概要



写真 1：授業実践を行ったクラスの子どもたちの様子

本稿で取り上げる学校は、中国内モンゴル自治区の東部に位置する、遊牧が中心的な生活方法になっている地域の小学校「ゲリチル小学校（格日朝魯小学）」である。当学校には、幼稚園と中学校が接続している。通学している子どものほとんどが半農半牧の生活をしている家庭の子どもである。内モンゴル自治区の大半の学校のように当学校の子どもたちも寮の生活で過ごしている。

訪問は、2014年9月5日に行った。当学校は、1クラスは48名程度、全学では、10クラスで編成されている。1クラスには1名の担任教師がおり、日本の中学校や高校と同様に教科担任制を取っている。

3. 調査報告

今回の調査および授業実践には、1クラス48名の子どもと美術科専科の玉春（ギョクシュン）先生が協力してくれた。

調査内容と授業実践については、「子どもの実態」、「美術教育の現状」、「授業実践」の3つの項目に分けて報告する。

3-1. 子どもの実態

モンゴルは、東アジアの北部の遊牧民族である。13世紀にモンゴル国を起し、モンゴルという名前をつけたが、1949年の中華人民共和国の成立により一部が中国の自治区になった。

以前は、モンゴル民族の子どもたちは、家庭での教育を受けて育っていた。家庭教育は、モンゴル人の遊牧生活のため、人々は分散して生活をしていて、多くの子どもたちが一カ所に集まって学ぶことは困難であるという生活の条件の基で形成された。家庭教育では、現代で言うところの、モンゴル文字、算数、化学、物理学、気象、天文学、医学、各種工芸、地理、牧畜、家政学などの学科を自分たちが日常生活に従事する経済や仕事と密接に関連づけて教えていた。これは、遊牧文化をもつモンゴルで最も適した教育形態であった。特徴としては、①遊牧生活と結び付け、家畜や手工業の作業中に行う。②親自らが先生となり、子どもたちが生徒となって、1つの家に住みながら行われる。美術教育も家庭教育の中で民衆芸術として継承されてきた。

しかし、現在の内モンゴル自治区の子どもたちは、家庭教育を受ける機会が非常に難しくなっている。その理由は、社会変化によって家庭教育が低下していることがある。経済発展、情報化など、社会変化に伴い急激な化都市への人口集中や、中国の多民族の文化の流入と漢民族の文化から受けた刺激による社会変化の中で、人々は高学歴志向の考えを持つようになり、子どもたちを学校に任せるようになった。学校集中型（1990年代から村の小学校を郷・鎮や県に集合させて統合したもの）の普及によって子どもたちがほとんど寮の生活で過ごし、家族と一緒にいる時間が減っている。学校と保護者が連帯で参加できる教育プログラムがないことや、保護者自身の学歴が低いために、子どもの学校での勉強が分からず、子どもの家庭での教育が低迷している。このような社会状況の中で、子どもたちは、自然の素材と触れる経験が少なくなっている。また、人と関わる経験が減少し、家庭教育を受ける機会が減少している。さらに、地域文化が解体し、伝統文化の継承が衰退している問題も起こっている。

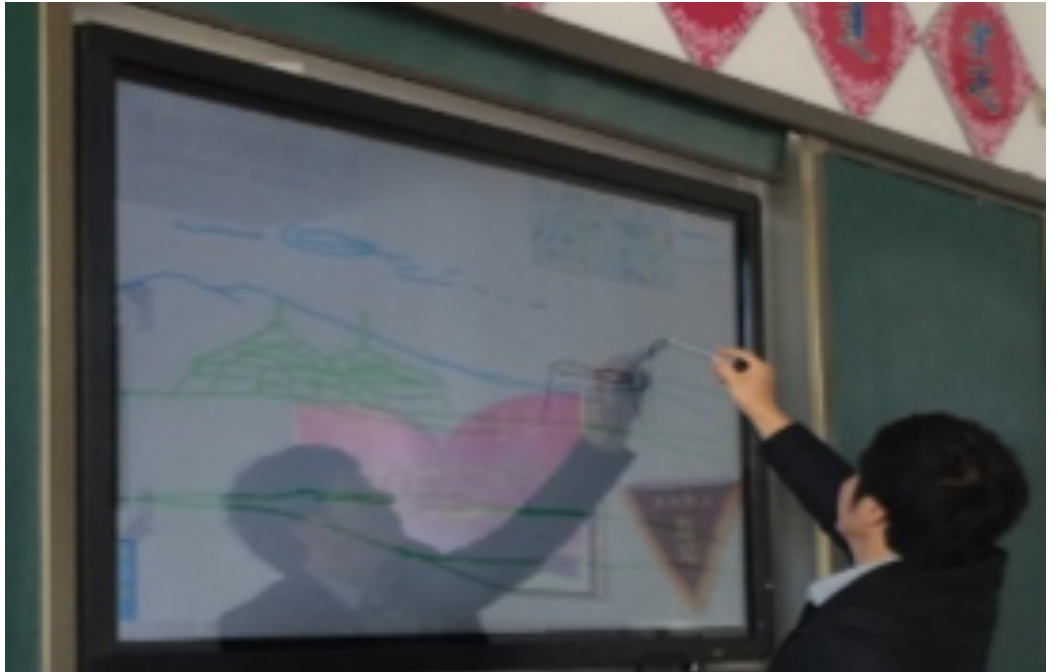


写真２：先生が黒板に絵を描いて模範を見せている



写真３：先生の描いた絵の上に自分の考えを加えて描いている

３－２．美術教育の現状

1) 中国の学校教育では過度になり、点数化される科目が重視され、他小学校から受験教育方、実技の授業は軽視傾向にある。例えば、美術と音楽、体育など得点化による試験が行われない教科は必要とされない科目となっている。このような科目は学期中や学期期末の試験の時期には休講になっている。

2) 美術教科書は、地域に合わせた教科内容を取り入れることが許されているが、内モンゴル自治区の美術科は、教科書の題材を開発する能力を持っていないため、全国一律の教科書が用いられている。中国の中心地域、北京や上海で作成された教科書の内容を内モンゴル自治区の教育出版社が翻訳して出版している。このような状況によって子どもの生活実態に合った題材や材料を授業内容に取り入れることは難しくなっている。

3) 教育方法については、教科書の内容を中心として教えられている。そして、授業の内容は他の科目の内容（例えば言語や社会など）と関連させて教えることが重視されている。また、国民に課された「素識教育」のため、子どもの座る姿勢、ペンの持ち方には規則がある（写真1を参照）。美術は、絵画の技法を中心に教えられている。具体的には、教師が模範を示し、講釈する方式によって授業が行われている。例えば、まず、先生が草原について話し、草原のイメージを子どもたちに想像させるために、文学の草原という歌詞を読んだり、模範として黒板に草原の絵を描いたりする。そのあと、子どもたちがその絵を模写しながら絵に自分の考えた内



写真4：農業生活が中心になっている地域の子ども（2年生が描いた絵）

容を加えて描くような学習方法を取っている。このようなやり方によって、実際には、生活している場所が全く違い、学校も異なり、学年も違う子どもの描いた絵が同じようになる状態となっている。例えば、一番上に太陽と雲があって、真ん中に山あって、その下に草原とゲル（家）があるような絵である（写真2、写真3を参照）。

当地域のこうした現状を改善するために、次の実践授業を行った。

3-3. 授業実践

1) 材料は、「羊毛」であり、理由は、①当地域の生活で昔から羊毛が様々な形で使われていたことである。例えば、モンゴルゲル（家）のフェルト、靴、服、玩具、模様や装飾を作るなどに使われている。②子どもたちが理解し易い。子どもたちは、家事の手伝いを通して羊毛をよく理解できる。③手に入れやすい。この地域の羊毛は高価値ではないため（価値は低いので）、家事で日常的に使うものになっている。

2) 授業題材は、「羊毛を使って自分の好きな物をつくりましょう」（授業時間：90分）である。授業は、二つの部分から構成される。一つ目の部分は、絵を描くことを中心として行った。9月は、この地域の新学年が始まる月であり、夏休みの楽しい時間が終わったばかりの子どもたちに自分らしく想像させるために夏休みに体験したことについて描かせた。二つ目の部分では、一つ目の部分で描いた絵に基づいて羊毛を使って立体物を製作することである（写真5、写真6を参照）。

3) 羊毛を用いた製作方法は、この地域の伝統的な製作方法にある作り方を指導したものである。お互いに鑑賞し、協力するために8人のグループに分け、以下の手順で行った。① 配られた羊毛を1枚ずつ形に次々と分けていく。② 分けた羊毛の1枚を自分の好きな大きさに丸めて水に濡らす。③ 濡らした羊毛を緩やかに握って形に進み、針を使って接続する。④ できた形にピースなどで装飾する（写真7を参照。）

4) 授業中に見られた子どもたちの姿は以下のとおりである。① 自分がつくりたい物があってもいちいち先生の許可を取ろうとする。（例：授業前から、自分のつくりたい物をつくっていいかと聞く。）② 自分のやっていることが正しいか、正しくないかを先生に何度も確かめる。③ 家の動物や家で使っていた羊毛の道具について話しながらつくっている。④ 絵を描くよりつくりたい意欲が高い。⑤ つくった物を繰り返してやり直し、また他の物にすることができている。



写真5：子どもの描いた絵。内モンゴルでは評価されていない絵に見られている状況である



写真6：子どもたち羊毛使って作った作品

5) 授業後の子どもの感想は以下のとおりである。① 作品を家に持って帰りたい。② 友達の作品を見て私ももう一回作りたい。③ 自分のつくった物に満足した。④ 楽しかった。⑤ 家のにおいがする。

4. 考察

以下では、子どもたちの授業中の反応と授業後感想を基にした考察を示す。

4－1 授業中の子どもたちの姿からの考察

まず、学校教育の受験教育の影響を受けているためか、子どもたちの自己判断が限られている。子どもたちは、つくり方はあらかじめ決まっている方法があると思っており、自分で自由に工夫することができない。つくることが決まっても自分のやり方が正しかどうかについて教師からの確認をもらいたがる。今回の授業を通して、後半になって子どもたちが開放されている感じが表れた。

4－2 子どもたちの材料の活用からの考察

子どものよく知っている材料を使ったので、材料に対する不慣れさが無く、受験教育の影響により自分で決定できない傾向を持ちつつも自己表現ができるようになっていく。様々な材料や道具などの扱い方などが分かり、想像を広げている様子が見られた。羊毛は、子どもたちが理解している材料であるから、羊毛を触る時点で自分の家のにおいがするなど、自分の家で羊毛から物を作るときに使っていた道具についてお互いに話すなどの姿が見られた。自分の持っていたイメージを基に新しいイメージや形などについて想像が広げ易い題材となった。

4－3 美術教育評価標準からの考察

試行錯誤しながら、繰り返して探求することができた。授業の後半になって、子どもたちが自分の作ったものについて繰り返し形を変えて別のものを作ったりしていた。失敗しながらも何度も挑戦し作り直している姿が見られた。確実な方法を自分で獲得し、確認する力が伸びていることが見受けられ、子ども達も達成感を持つことができた。

今後も、以上のような効果のある教育実践を通して、子どもの想像力を広げる地域材料を活用した美術教育の学習を開発していきたいと考える。

ベトナムの美術教育を見学して思ったこと

山口大学 福田隆眞

昨年と一昨年、ベトナムの首都ハノイに美術教育の調査に行ってきました。近年、経済成長が目覚ましい社会主義国です。日本との関係は良好で、インフラ整備に日本がずいぶんと支援している様子が見られました。美術教育の調査として、一昨年は、教育訓練省、小中学校、教育大学、美術大学、美術館を訪問し、美術文化と美術教育の現状把握をしました。

ベトナムの現行の学習指導要領は技術の習得と文化遺産の理解、継承が重視されており、お手本画と美術史の題材が多く取り上げられていました。実際に、中学校で授業見学をしました。その時の題材は、花瓶の花の写生でした。若い女性の美術教師は教科書の図版通りの生物を机上に用意して、黒板には絵の構図をグリッド使って描いていました。生徒は画用紙に升目を描いてその構図を写し取り、色鉛筆で彩色していました。まさにお手本画で臨画教育でした。

小学校にも同様なお手本画の題材がありました。私が見学した時は自由画の題材でした。児童はそれぞれに楽しかったことを思い出し、様々な場面を色鉛筆で描いていました。授業後、担当教員に聞いてみると、子どもたちはお手本画よりも自由画の方が楽しくて好きです、と言われました。

ベトナムは現在、経済成長の真ただ中にあり、国全体に高揚感があります。そうした状況の中で、教育訓練省の美術教育担当者に教育課程について意見を伺うと、「近いうちに、日本の教育課程を参考にして、子どもの主体性を生かす教育課程に改訂する計画です。生きる力を育成したい」と話されました。児童生徒に教え込む教育課程から、児童生徒が主体的に学ぶ教育課程に変えていきたいとのことでした。

一方、学校教育とは別に芸術教育を行っている場面に昨年は出会いました。ベトナム共産党が運営している「子どもの宮殿」と呼ばれる課外活動の教育機関です。これはベトナム全土で開校されており、美術、音楽、舞踊、体育の教育を休日に行っており、講座を選択して子どもたちが自由に学習できる学校です。ハノイの中心にある学校にたまたま訪問することができました。その学校はベトナムで一番大きな学校で、美術の教員は15人いるそうです。全員が美術家で日ごろは作家活動をして作品発表をしています。

子どもの宮殿での授業を見せてもらいました（写真1,写真2）。



(写真1)



(写真2)

静物画を小学生が描いているところでしたが、日本の元気のよいクラスと同じでした。教師は全体指導や個別指導で、筆使いや配色をアドバイスしていました。校長が言うには「教育訓練省の美術教育は古いタイプで、こちらは子どもたちに自由に、創造的に表現させることを目的とし、教師はそのための指導をしている」とのことでした。また、「学校の教員は子どもの扱いは上手だが、美術作品を作る意志が弱い。こちらは美術家が教えているので、子どもたちも喜んでいる」とも言われました。

教育内容と教育方法は両輪であり、そのバランスがいつの時代にも重要になっている。日本でも考えさせられる問題と受け止めました。

この学校のとなりの公園では、子どもの宮殿の生徒も参加している絵画展が行われていました（写真3）。

（写真3）



エントリー・ポイント、MTV (Making Thinking Visible) および VTS(Visual Thinking Strategy) アプローチの関連性 ——オランダでの新しい鑑賞教育の試みThinking Museumの実践から—— 埼玉大学 池内 慈朗

エントリー・ポイント（MI知能の組み合わせの学習の入り口）、VTS(Visual Thinking Strategy視覚的思考方略)、およびMTV (Making Thinking Visible思考の可視化) の関連性について考察した。その好例が、アムステルダムにあるTropenmuseum(トロッペン美術館、写真1)等でClaire Bown女史を中心としてVTSとプロジェクト・ゼロのMTVをIntegrateした“Thinking Museum”という類をみない面白い「鑑賞教育」の取り組みがあったので、以下、内容についてみていこう。

アムステルダムは、Rijksmuseum(アムステルダム国立美術館)があり、レンブラントの「夜警」や一連のレンブラントの作品、ヴァン・ダイク、フランツ・ハルス、ヨハネス・フェルメール、ブルーゲルなどのコレクションで有名である。また、Van Gogh Museum（ヴァン・ゴッホ美術館）など美術館の宝庫である。

Claire Bown女史は、かつてトロッペン美術館に勤務していた事もあり、今回の話題は、この美術館が「会場」となる。トロッペン美術館は、オランダがかって東南アジアに勢力を伸ばし、インドの一部、インドネシアを植民地にし、VOC東インド会社などで栄えた時代の植民地からの博物的要素のコレクションをベースに、もとはオランダ内のHaarlemに設立されColonial Museumと呼ばれていたものである。1871年よりpublicにオープンされている。Tropenは、トロピカルに近い意味合いであろう。また、現代アートのコレクションもひけをとっていない。

(写真1) Tropenmuseum(トロッペン美術館) アムステルダム



プロジェクト・ゼロの行っている、MTV (Making Thinking Visible) とMoMA から始まったVTS(Visual Thinking Strategy)という似通った名前であるが、どのような共通点や異なった点があるのか。

- (1) MTV (Making Thinking Visible)
・ Visible Thinking (思考の可視化) の特色

学習の可視化は、イタリアの幼児教育で有名なレッジョ・エミリアとハーバード・プロジェクト・ゼロとの協同研究Making Learning Visibleが有名である。思考を可視化しようという試みで、MLVの一連のプロジェクトであるVisible Thinkingは、プロジェクト・ゼロで長年、学習の転移などの担当してきたDavid Parkinsを中心とするプロジェクト・チームである。Visible Learningが、学習の視覚化であるのに対して、Visible Thinkingは、その名の通り、「思考の視覚化」である。パーキンスを中心とした、Visible Thinkingのプロジェクトでは、まずルーティン (Routine: 日課、日常業務と異なる物)が重要になる。

Visible Thinkingにおいて実際的で機能的にアクセスできる中心要素となる。もう一方は、理想的に考える (Thinking Ideals) である。Innovating with Intelligenceでは、知能を用いながら発明を行うというもので、Artful Thinkingでは、アートを用いた思考について、Culture of Thinkingでは、文化の異なりからコンテキストを考慮した思考について、発展させている。

アムステルダムのインターナショナル・スクールを中心としたプロジェクト・ゼロのロン・リッチハート (Ron Richhart) が行ったVisible Thinkingの教育の実践内容を見てみよう。

(写真2) 宝飾品のコレクションも多い



(1) Explanation では、アムステルダム・インターナショナル・スクールの小学校5年生で、テーマは「子どもの権利について考える」では、子どもが背負いきれない程レンガを背負った写真、織物をしている子どもの写真、ゴミの中にいる子どもの写真をみせ、ワークシートの左側に自分の見たものと、右側に憂慮するものを書き出すように云われる。子ども達は、小グループで議論し、結論を出していく。(2) Explanation Game (発見ゲーム) では、アムステルダムの幼稚園で、子ども達に染色体が数百個あるような絵画をみせ、教師は、何がみえるかを聞いていく。「動物が転がりまわっている」という子、ある子は、「日本の漢字だ。僕、見たことあるんだ」(3) Connect Extend Challenge (関連と拡張への挑戦) では、アムステルダムの小学校5年生のクラスで、自分の家族の移住の歴史を述べ合うもので、思考の可視化の実践例をいくつかあげている。Visible Thinkingの他にもプロジェクト・ゼロでは、があり、Making Learning Visible、Making Thinking Visible、Making Teaching Visibleの三部作となる。

(2) VTS(Visual Thinking Strategy)

VTSとは、ニューヨーク近代美術館 (MoMA) が鑑賞教育に取り入れてやっているというので一時少し話題になっていた。アピゲイル・ハウゼン女史が、Harvard 教育大学院で博士論文のテーマが、Aesthetic Developmentで、その後もHarvard Project Zeroで研修し、VTSの基礎理論として用いたものである。鑑賞教育に「美的発達理論」を取り入れたことでも知られている。

VTSの中心人物、フィリップ・ヤノウィンは、元ニューヨーク近代美術館 (MoMA) 教育部部長を勤め、現在、NPO法人 Visual Understanding in Education(VUE)創設者・ディレクター) である。彼もやはりProject Zeroでの研究がもとになっている。京都芸術造形大学に来られ集中講義を4-5年前したこともある。アートを通じて鑑賞者 (学習者) の「観察力」、「批判的思考力」、「コミュニケーション力」を育成する教育カリキュラムを開発してきたのがニューヨーク近代美術館 (MoMA) であり、VTSがハウゼン女史、ヤノウィンによって開発された。

VTSは、対話を通じて過程の中で「美的発達」とともに「言語」や「思考力」の発達を促そうとするものです。VTSは、3つの特徴 1)協同学習への促し2)教授・学習内容の振り返り3)パラフレーズ (言い換え) をあげている。

(写真3) ホールに展示されたインスタレーション



(写真4) 自分の模写と実物の違いをcriticalに比べる子どもたち



Claire Bown 女史は、ハーバード・プロジェクト・ゼロの鑑賞教育の理論と実践を中心にオランダで行っている。Claireの仕事は、日本では存在しないような、「美術館・博物館鑑賞の指導アドバイザー」として、アムステルダムを中心とした近郊の美術館、博物館で小学校、中学校から依頼があれば、Thinking Museumというワークショップ、企画のプログラムを要望によって作り上げるインディペンデン Museum Educatorである。

(写真5) 解説中のClaire Bown 女史

Thinking Museumのユニークさは、VTS (Visual Thinking Strategies) とVisible Thinking (思考の可視化) を一緒にしている点だと思います。VTSの教授・学習内容の振り返りなど書く事が重要のようですが、思考の可視化には、ポートフォリオなど、の方法を用いている。

How long does the average person spend looking at an object or painting in a museum? (平均的な人は、美術館の作品や絵画をどのくらい見るでしょう。) その後、以下のルーティンが順に行われていく。(1)Thinking Routine Practice 1 – See-Think-Wonder

(2) Background info & case study

(3)Thinking Routine Practice 2

(4)Thinking Routine Practice 3 - Headline (あなたが今、この話題・問題のためにHeadlineを書くことになっているならば、記憶されていなければならない最も重要な、その見出しは何ですか?) と答えていく。

(写真6) インドネシアの作品



(写真7) トロップン美術館の中でも人気の高い作品



Claire Bownは、本来、学校で用いられるVisible Thinkingを美術館・博物館で行う理由について、Visual Thinkingは博物館で開発されたが、Visible Thinkingは学校で開発された。"Making Thinking Visible"は、22のルーティーンを使っている。ルーティーンとは、日常の活動ではなく、異なる物（1時間で3か5の作品）について2、3のステップの同じ質問を繰り返し、子どもが答えることである。例えば、What do you see? What do you think is going? What does it make you wonder? と、質問が繋がり、とにかく美術作品について、生徒に異なる観点から言語化させる、他の子と話し合わせるのがメインである。その後、Discussion/questions が続いていく。対話式鑑賞を含め、欧米圏の自己主張をする文化と自己表現すらためらう日本の違い、欧米圏の言語至上主義も含めて、欧米圏、オランダでは有意義な活動であるうが、日本ではどうかと感じさせるところはある。

Visual Thinkingは美術館で開発されたが、Visible Thinkingは学校で開発されたという大きな違いがある。エントリー・ポイントの考えを入れていくと異なった世界が広がる。Project MUSE (ミューズ) のエントリーポイント・アプローチは、ガードナーのMI理論を基に、5つの思考パターンを見いだしており、思春期 (adolescent) 以降、5つのエントリー・ポイントにおける多重なエントリー・ポイント (multiple entry point) といっている。5種類のエントリー・ポイントは、説明(Narrative)、理論・数量(Logical/Quantitative)、基礎(Foundational)の美的(Aesthetic)、経験(Experiential)としている。エントリー・ポイントは、5つの窓が幅広い意味の表現を奨励し、可能にし、更に、学習者には、芸術作品に対する自分なりの理解を確立するよう要求している。これらの窓により、観賞者はそのような観点を伝えるのに必要な情報を探り出すのが簡単になる」というものである。

Thinking Museumは、VTSの、「観察力」、「批判的思考力」、「コミュニケーション力」を、MTVの、美術作品について、生徒に異なる観点から、絵画の物語性を読み取り、言語化させるという点では、視覚的な曖昧なものを、目的を持って、分析的にみていくという点を統合したプログラムである。エントリー・ポイントの、説明(Narrative)は、絵の背後のstoryの、未来、過去の流れまで考察していくもので、story behindという点で重なりは、明確である。エントリーポイント・アプローチは、トロッペン美術館のような博物的要素の強いものには、歴史、地理、民俗学、博物学などとさらに他教科にも興味を拡げられ、美術によって学習の入り口となり、VTS、MTVが洗練されて合同されれば、より鑑賞教育は面白くなるであろう。どこの美術館も、何百の美術館もやっているといったデータは長期なのか単発なのかも解らない。アレナスも、VTS も、MTVも、エントリーポイントも到達目標の違いが異なり、どれも長所短所はみられる。日本人的に、「いいとこどり」をそろそろ考えようと思っている。我々、美術教育者の到達目標は、皆おおむね同じであると思います。協力希望者は、是非私に声をかけてください、そして色々と教えてください。

謝辞： オランダ・ドイツを訪れた際の写真を提供していただいた立教大学名誉教授・冨安敬二先生、資料提供をしていただいた関西大学・松村暢隆先生に深く感謝いたします。

[参考・引用文献]

- ・ Philip Yenawine , 2013, Visual Thinking Strategies, Using Art to Deepen Learning Across School Disciplines, Harvard Education Press
- ・ Visual Thinking StrategiesのHPは、<http://www.vtshome.org> (2015年9月14日アクセス)
- ・ 渡部晃子, 2010年, 「鑑賞教材『Visual Thinking Strategies』における教育目標の変化と特徴」, 『美術教育学』 第31号, pp.441-452
- ・ 池内慈朗, 2010年, 「レッジョ・エミリアとハーバード・プロジェクト・ゼロによるコラボレーションMaking Learning Visible—幼児教育から学ぶドキュメンテーションによる学習過程の可視化—」 『美術教育学』 第31号, pp.43-54
- ・ 池内慈朗, 『ハーバード・プロジェクト・ゼロの 芸術認知理論とその実践—内なる知性とクリエイティビティを育むハーバード・ガードナーの教育戦略—』 2014年, 東信堂 pp.270-287, pp.322-325, pp.426-446
- ・ 写真4 は、<http://thinkingmuseum.com>より Claire Bownの許可を得て転載。(2015年9月14日アクセス)

国際交流委員会 自己紹介

ブータン王国にみる造形教育の方向性

大泉義一（横浜国立大学）

私が現在、興味を抱いているのは、ブータン王国の造形教育のあり様についてです。ブータン王国（Kingdom of Bhutan）とは、周知の通りヒマラヤの麓に位置する小国であり、ブータン王国の名を世界に知らしめたのは、「GNH」という言葉の概念です。「GNH」とは「Gross National Happiness」の略語であり、和訳されると「国民総幸福量」となります。これは、ブータン王国の第4代国王、ジグメ・センゲ・ワンチュク（Jigme Singye Wangchuk）が、1976年にコロンボで開催された第5回非同盟諸国会議において“GNH is far more important than GNP. (GNHはGNPよりも重要である)”と発言したことから生まれた概念です。いわゆるGNP（国民総生産・Gross National Product）が国の豊かさを数値化して示すのとは異なり、GNHは国民全体の幸福度を示す尺度であり、経済的豊かさを中心にした物質社会への警鐘を鳴らす概念として注目されたのです。私はこれまでに3回、ブータン王国を訪れ、現地で行われている造形教育の実態を調査し、それが仏教思想に基づく「関係性」を重視した教育の一貫であることを明らかにしてきました¹⁾。そしてブータン王国は、昨年度よりナショナル・カリキュラムに“Art”を導入しています。そこで今年の3月に訪問し、パイロット・スクールにおいて実験的に実践されている“Art”の教育実践を参観してきました²⁾。そのあり様は、“General Art”（現地では西欧美術をこのように表現）に依拠した内容であり、それを専門に学んでいる指導者が不在の状況にあるがゆえに、教科書（“Arts Education”（図1））に則った指導が行われていました。これについての詳細は、機会を得てご報告したいと思います。

私がなぜ、ブータン王国の造形教育のあり様に興味を持ったのかと申しますと、我国がかつて意思決定を行ってきた教育や文化のあり方を、ブータン王国においてはこれからどのように選択していこうとするのか、その葛藤から学ぶことがあるのではないかと考えているからです。ですので、私の研究のスタイルは、国際的な研究の王道とも言える先進的な海外の教育を吸収するというよりも、比較研究を通して反省的に我国の教育を振り返るものと言えるかもしれません。国際交流委員会へは、そんな奇妙なスタンスでの参画となりますので、むしろ私の方が多くを学ばせていただくことになると思いますが、どうぞよろしく願いいたします。

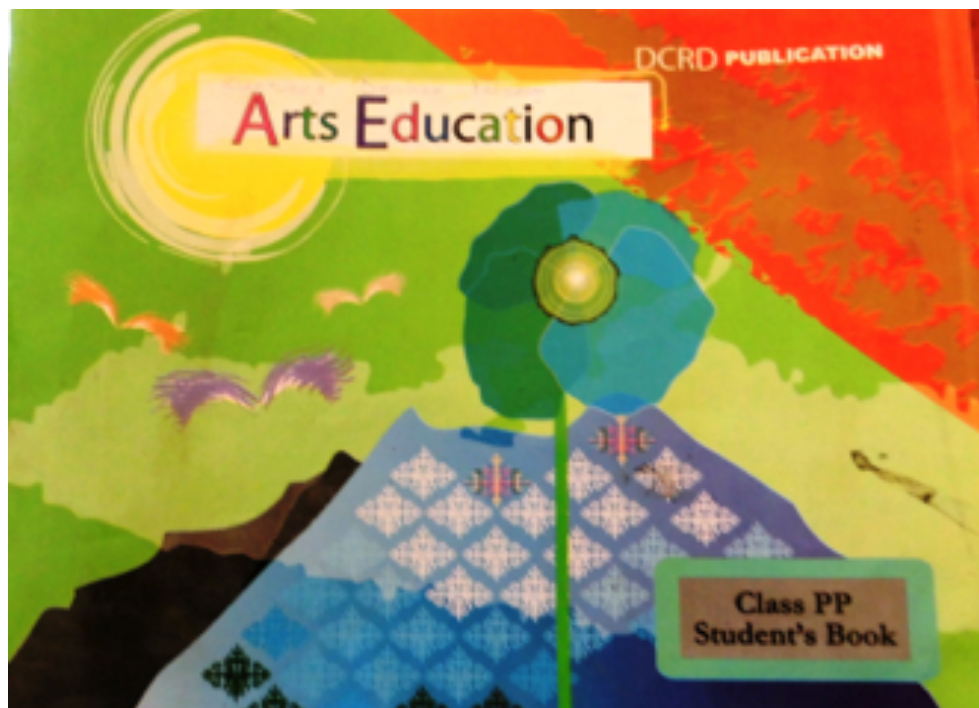


図1 “Arts Education”（PP.Class表紙）

註

1) 調査研究成果は、大学美術教育学会誌の第43号、44号に掲載されています。

2) 2015年3月3日から9日にかけて訪問し、教育省、現地学校におけるインタビュー、参観を実施しました。

編集後記

IRCN11号発行は発行予定日から半年以上の遅れとなり、早い段階から投稿して頂いた先生にはご迷惑をおかけしましたが、ここに発行できることを関係の皆様に感謝いたします。

11号は「世界の美術教育と教育実践」を特集とし、現在の美術教育の諸状況を現在進行形によって報告していただきました。フランスレポートを小笠原先生、アジア地区として、格根薩仁先生（内モンゴル）、福田隆眞先生（ベトナム）、鑑賞教育の最前線を池内慈朗先生、そして委員会就任の挨拶を兼ねて大泉義一先生（ブータン王国）からの報告を掲載しました。

また、本国際交流委員会である、それぞれ地域・学校種によって分担し、報告させていただきました。

次号以降も、海外での取材・研究に取り組む会員からの投稿をお待ちしています。

IRCNは本誌第11号からwebからのPDF配信となります。その主たる理由は紙媒体での発行に係わる予算を軽減するためです。

国際交流委員会では紙媒体での継続を希望し、10号までは冊子形態で発行し、学会関連情報郵送の際に同封していただいて来たのですが、学会にかかる経済的・事務的負担を軽減するためPDF配信とする方針で編集することになりました。

紙媒体のように手元にとって読むことができない、冊子とするためには印刷したりしなければならない、など不便をおかけします。

一方、PDF配信によるメリットは、これまで限られた紙幅での投稿依頼であった制約から解放されたこと、資料図版・写真などがカラーで掲載できること、また希望によってはムービーなど多様な媒体を掲載できることなどが上げられます。

PDF媒体となってもこれまで同様、ご支援よろしくお願いします。

（安東恭一郎）

本誌では、海外の美術教育実践、研究、交流に関わる記事を募集しています。

アナウンス2000字～、レポート4000字～です。

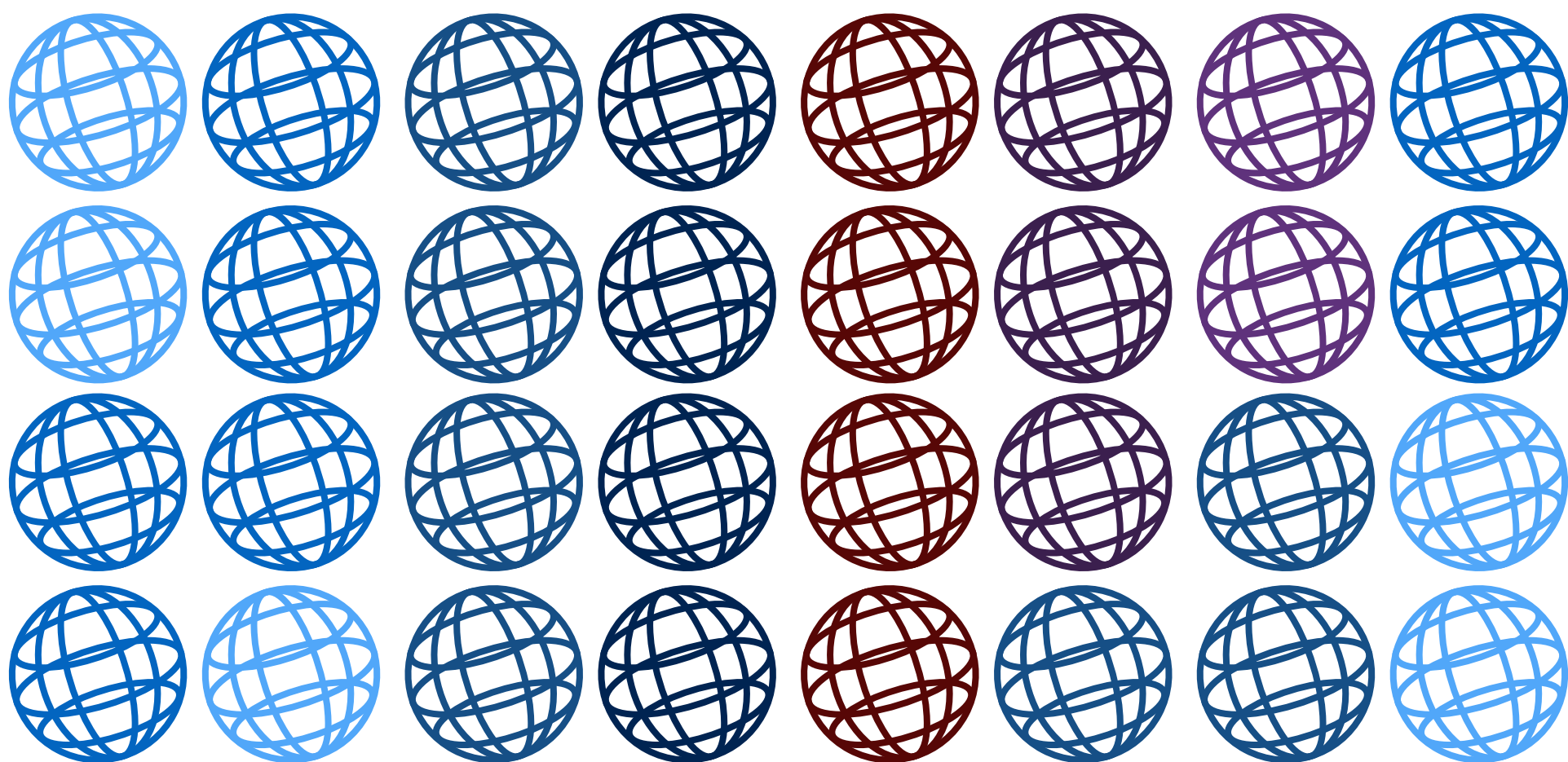
（文章上限についてはお問い合わせ下さい）

会員の皆様の積極的な投稿をお待ちしています。

【お問い合わせ先】

香川大学 安東恭一郎

ando@ed.kagawa-u.ac.jp



IRC第11号

2015年8月●日 発行

発行：大学美術教育学会 国際交流委員会

東京学芸大学 理事長 増田金吾

編集：香川大学 委員長 安東恭一郎

DTP：安東恭一郎

大学美術教育学会
国際交流委員会
国際交流情報誌

2015
IRCN
Vol,11

